ご あ い さ つ

本日は「上野学園大学／上野学園短期大学部 惠声会第35回定期演奏会」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

現在2年に一度開催しているこの定期演奏会も35回を数えるまでになりました。これまで個人単位での参加が主だった中、今回はより多くの方にご参加いただけるようにと企画致しました。ソロ、アンサンブルに加え混声合唱など一人一人の力を結集した会員の皆様の演奏を心ゆくまでお楽しみいただきたいと思います。

最後になりましたが、本日の演奏会開催にあたり、惜しみないご協力をいただきました学校法人上野学園、先生方、関係者のみなさまに、心より御礼申し上げますとともに、今後も変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

惠声会　会長　庄　智子

programme

第一部

《合唱》	吉田 伸昭（指揮）※賛助出演 小林 英之（オルガン）※賛助出演 上野学園OB・OG合唱団 上野学園OB・OG管弦楽団	オラトリオ「メサイア」より“ハレルヤ”	G.F.ヘンデル
《ピアノ》	村田 融代	幻想曲 ヘ短調 Op.49	F.ショパン
《2台ピアノ》	Ⅰ 石井 美由紀 Ⅱ 藤井 陽子	組曲 第2番 Op.17より 第4楽章“タランテラ”	S.ラフマニノフ

第二部

《声楽》	平居 みゆき（ソプラノ） 浅香 郁子（ピアノ）	私は家をつくりたい 歌劇「アンナ・ボレーナ」より “私の生まれたあのお城”	G.ドニゼッティ G.ドニゼッティ
《二重唱》	丸山 央（ソプラノ） 佐俣 薫（ソプラノ） 齋藤 聡子（ピアノ）	歌劇「カルメン」より “何も恐れることはない” 歌劇「コシ・ファン・トゥッテ」より “私はあの栗色のほうがいいわ” 歌劇「ロミオとジュリエット」より “私は夢に生きたい”	G.ビゼー W.A.モーツァルト C.グノー
《ピアノ》	池平 仁史	ソナタ 第10番 Op.70	A.スクリャービン
《ウィンドオーケストラ》	彦坂 眞一郎（指揮）※賛助出演 上野学園OB・OGウィンドオーケストラ	アルメニアン・ダンス パートⅠ	A.リード

第一部　曲目解説

オラトリオ「メサイア」よりハレルヤ：G.F.ヘンデル

1741年に作曲されたこの作品は、バッハの二つの受難曲と並んで有名な宗教的作品である。「予言・降誕」「受難」「復活・永遠の生命」の三部構成で歌詞は英語で書かれている。“ハレルヤ”は第二部の最終曲で、全能の神を賛美する壮麗な合唱曲である。初演はダブリン、作曲者自身の指揮で大成功を収めた。2年後のロンドンでの初演の際には、国王ジョージⅡ世が“ハレルヤ”の部分で起立、聴衆もこれに倣ったというエピソードが残されている。当時のイギリスは飛躍的な発展を遂げようとしており、ヘンデルは、徐々に台頭し始めていた勤労者階級の支持を得て、オラトリオ作曲家としての確固たる地位を築いていったのである。

幻想曲 ヘ短調 Op.49：F.ショパン

1841年、ショパンは生活面、精神面共に生涯最も充実していた時期にあり、ジョルジュ・サンドの細やかな愛情にも包まれていて心置きなく作曲に専念出来る環境の中、ノアンのサンド宅で着想されパリに帰って完成された。ここにはサンドとの不和による心の悲しみが潜められている。曲の構成は豊かな楽想が次々と現れ、各楽想はソナタ形式の大きさと広がりの中で対比と調和を織り交ぜながら統一感を生み出している。葬送行進曲風でゆっくりはじまり、叙情性から劇的な壮大さまでショパン自身の人生が音楽になっているかのような作品であるように思う。

組曲 第2番 Op.17より 第4楽章“タランテラ”：S.ラフマニノフ

1900年12月から1901年4月にかけて作曲された。その前、交響曲第1番の失敗によりラフマニノフは神経衰弱に陥っていた。前作“楽興の時”からは5年程の空きがあり、この曲はそこからの復帰を示す、充実した作品になった。初演はジロティとラフマニノフ本人によって1901年に行なわれた。同時期の作品として、有名なピアノ協奏曲第2番がある。組曲は4曲からなり、タランテラは最後を飾る第四楽章。毒蜘蛛（タランチュラ）に刺されると、踊り続けることで解毒できるという言い伝えがあり、それを表すような途切れることのない急速な6/8拍子（または3/8拍子）の曲。華やかな技巧を駆使するスピード感と強靭な低音はラフマニノフならではの魅力。

第二部　曲目解説

私は家をつくりたい：G.ドニゼッティ

この歌曲は歌曲集「インフラスカータの秋の夕べ」に含まれている。別名“船乗りの恋 Amor marinaro”と呼ばれるナポリ風カンツォネッタ。

歌劇「アンナ・ボレーナ」より“私の生まれたあのお城”：G.ドニゼッティ

歌劇「アンナ・ボレーナ」は、1830年にミラノで初演された2幕のトラジェディアリリカ（悲歌劇）である。16世紀のイングランド国王ヘンリー8世とその2番目の妃アン・ブーリンの史実に基づく作品である。「ドニゼッティ女王三部作」と呼ばれる、テューダー朝とその女性たちを主役としたオペラの1つである。この“私の生まれたあのお城”というアリアは王妃アンナが、夫である王から不倫の濡れ衣を着せられ正気を失い過去を振り返り歌うアリア。

歌劇「カルメン」より“何も恐れることはない”：G.ビゼー

メリメの小説「カルメン」を元にジョルジュ・ビゼー（1838～1875）により作曲され、スペイン・セビリアを舞台に魔性の女カルメンと軍隊の伍長ホセの破滅的な愛を描いた作品である。この曲は、カルメンとは対照的なキャラクターを持つミカエラの有名なアリア。ホセに母親が危篤であることを伝えに密輸入者たちの根城である不気味な山中に来たミカエラが、恐怖に怯えながら「勇気をください」と彼女の一途な思いを切々と大変叙情的なメロディで歌う。

歌劇「コシ・ファン・トゥッテ」より“私はあの栗色のほうがいいわ”：W.A.モーツァルト

モーツァルトが1790年にロレンツォ・ダ・ポンテの台本に作曲したオペラブッファ。舞台は18世紀末のナポリ。青年士官フェッランドとグリエルモは、老哲学者ドン・アルフォンソと女性の貞操について賭けをする。青年二人が変装し、お互いの恋人を口説く女性たちは恋に落ち、結婚の約束までしてしまうが、最後には再び愛を確認し合い、ハッピーエンドでオペラは終わる。「私はあの栗色のほうがいいわ」は、二人の恋人であるフィオルディリージとドラベッラ姉妹が、ちょっと火遊びをしてみてもいいかしら、と、婚約者たちが変装しているとも知らずに、異国の貴族の品定めをする二重唱。

歌劇「ロミオとジュリエット」より“私は夢に生きたい”：C.グノー

シェイクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」を原作としてシャルル・グノー（1818～1893）により作曲された。舞台は14世紀イタリアのヴェローナ。憎しみ合う2つの名家の抗争を背景に仇同士の両家の少年と少女が運命的な恋に落ち、最後は悲劇的な結末を迎えるという広く知られているストーリー。第1幕の仮面舞踏会でジュリエットがまだロミオと出会う前、乳母に結婚話を持ちかけられた際に「まだ結婚なんて考えられないわ。私は夢の中で生きていたいの。」とはぐらかし、このワルツ“私は夢に生きたい”を天真爛漫に歌う。3拍子のワルツにのせてジュリエットの恋に憧れる純粋な心を表現していく。

ピアノソナタ 第10番 Op.70：A.スクリャービン

1913年夏に短期間のうちに作曲され、自然を描いたソナタ第8番とほぼ時を同じくして書かれたこのソナタを、スクリャービンは「光と昆虫のソナタ」と呼んでいた。番号と出版順では最後のソナタだが、実際に最後に完成されたのは、ソナタ第8番だった。単一楽章で無調によっており、きわめて半音階的であるが、後期作品としてはさほど不協和に響かない。頻繁なトレモロとトリルの使用があり、これらの奏法について作曲者自身は「太陽の口づけである昆虫たち」の象徴であると説明している。トリルを「大気の動悸、揺れ、震え」と捉えていたスクリャービンは、このソナタのトリルに「力強く光が発せられるような」という言葉を記している。

アルメニアン・ダンス パートⅠ：A.リード

アルメニアンダンス パート1・パート2は、吹奏楽の中でも特に人気の高い作曲家であるアルフレッド・リード（1921～2005）の代表的な作品の1つであり、この曲は楽譜の出版が2回に分けられたことによりパート1とパート2に分けて呼ばれている。アルメニア伝統音楽の父と称されるゴミダス・ヴァルタベッド（1869～1935）が収集した4,000曲以上もある膨大なアルメニア民謡を素材にして、約10年の歳月をかけて書かれた全4楽章で構成されている組曲である。本日演奏するパート1は、この組曲の中の第1楽章部分となっており、5つの民謡がメドレー形式で演奏され、アルメニア独特の民族音楽が見事に表現されている。